

歌舟人



父隆慶一郎のこと

hanyū mana

羽生真名

歌舟人



父隆慶一郎のこと

hanyū mana

羽生真名

講談社

歌う舟人——父隆慶一郎のこと

1991年10月28日 第1刷発行

著者 羽生真名

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二二二／郵便番号一三二〇一
電話

文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四

書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二

書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価 一四〇〇円（本体一三五九円）



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部までお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問合せは、文芸図書第一出版部までお願いいたします。

©Mana Hanyu 1991, Printed in Japan

(文1)

ISBN 4-06-205663-1

羽生真名

隆慶一郎（池田一朗）氏の長女。昭和26年、東京に生まれる。日比谷高校から上智大学哲学科に学ぶ。

平成元年十一月四日、父君の死にあう。隆慶一郎氏の遺作『見知らぬ海へ』の中に、「隆慶一郎とフランス文学」が収録される。

目次・歌う舟人

プロローグ 7

1 自由を我等に

——少年時代〜終戦まで

12

2 マイ・ダーリン・クレメンタイン

——母との出会い

26

3 北ホテル

——夏の北軽井沢にて

36

4 ペーパームーン

——父と三人の子供たち

49

5 にあんちゃん

——シナリオライター時代

72

6 渚にて

——海辺の家

83

7 大いなる幻影
——雪の受験 101

8 花嫁の父
——わたしの結婚 110

9 天井桟敷の人々
——父の交遊録 122

10 黄昏
——病院にて 158

エピソード 199

資料／池田一朗著 ポール・ヴァレリイに関するノート

あとがき 224

装幀 菊地信義

歌う舟人——父隆慶一郎のこと

プロローグ

雲のような人だった。ふわふわと空に浮び、お天気と風向きの他には、特に影響されるものもないようにみえる雲。風が吹けば流れて行き、その時々には色や形を変えておもしろがる、入道雲のような存在が隆慶一郎という人だった。

時代によつて、また人によつて父に対する印象が驚くほど異なるのは、おそらくこのかわりのなさのせいではなからうか。入道雲という表現を父自身は手帳でやや自嘲的に使っている。あまりに形にとらわれない精神が、小説を書くこととする際マイナスに働くことを自覚していたのかもしれない。父にとって小説は憧れの佳人ではあったが、どうしても手

に入れなければならない運命ではなかった。

ところでお天気と風の他に、実はもう一つだけこの雲を動かすものがあつた。

母である。父から見た母はいくつになつても子供のように純粹で頼りなかつた。平気で思ひきつた行動をとるのだが、その一つ一つがどこか危なげで、やはり守らなければと思わせる恋女房だつた。

ある雑誌で夫婦特集が組まれた。作家、弁護士、医師……更に結婚十年目、二十年目……様々な年代、経歴の方々だつた。他の御夫婦は当然ながらお互いへのある程度の批判も含めた受け答えをなさつていたと思う。読者に、ははあ、夫婦とはこういうものかと思わせる企画の意図にそつた記事になつていた。ところが最長不倒距離ともいうべき四十年目の母の場合、どこまでいつても何をきかれても、とにかく父をほめちぎるばかり。インタビューの方はまずあきれ、次に大いに困惑こんわくなさつたと思う。いくつもの山を越え、四十年間連れ添つた夫婦を紹介するはずが、出てきたのは訳のわからないことばかり言う六十

歳のヘンゼルとグレーテルだったのだから。しかしさすがにプロ。

「でも、こんな夫婦ってステキじゃないでしょうか！」という絶妙のフォローで、見事次の御夫婦にバトンタッチしてあった。

大体母は批判的精神など棄にしたくともない人で、母の言うほど「みんないい人」ならば、警察はいらない。しかしこうまで全面的な信頼をよせられては、父もあまり悪いことはできなかった。いや悪いことも案外していたらしいのだが、少くとも母を悲しませず、せいぜい憤慨させる程度にとどめていた、というべきか。

やはり女性には、守っていると男性が錯覚するような部分的弱さをもつほうが断然得なようだ。部分的、といったのは全面的に弱い女性などあり得ないからである。古今東西、文学に登場する全面的に弱い人間というのは、例外なく男性だったのではなからうか。作家の目はやはり節穴ではない。

父は自分では車の運転をしなかった。短気なことで、飲む機会が多いことを考え、あえ

て免許をとらなかつたという。実際には、とうとうとしてもとれなかつただろう。父の友人のプロデューサー勝田康三氏の例もある。ある時、勝田氏が自動車教習所に通い始めた。しかし教官の高圧的な態度に我慢できず、「無礼者！」の一言でやめてしまったという。やはり時代劇を多く手がけた方は、科白も決まってくるようだ。父ならば、どんな啖呵たんかを切つてやめたことだろうか。しかし運転しないからといって助手席におとなしく座つていゝ父ではない。母に運転させながら、教習所の教官以上に注文が多かつた。

父が母の運転で芝公園のそばを通つた時、空を見上げている哲学的な風貌の浮浪者がいた。

「君と一緒にならなかつたら、僕はあゝなつてたかもしれないな」

父がポツンと言つた。たしかに母のような人がいなければ、父はヒッピーのように人生を送つたのかもしれない。世間からどう思われるかという発想は完全に欠落していた。人間本来無一物という言葉が好き那人だつた。

家族を非常に大切にしたが、一方で、

「わがまま勝手なことができて何らとがめられることもなく、気にもさわらないことが家族の条件であらう」(『一夢庵風流記』)

というように、家庭という枠組^{わくぐみ}に対してはどこか醒^さめたところがあつた。父自身、決して穏^{おだ}やかな家庭に育つたのではなかったからだろうか。

1 自由を我等に

大正十二年、関東大震災の直後、父は東京の赤坂に生れた。中学二年までここに住んだという。ひ弱な体格をした友達のいないいじめられっ子だったこと、台風が好きだったことなどは、『時代小説の愉しみ^{たの}』に詳しい。

家が貧しく、小学二年の頃から日比谷図書館まで歩いて本を借りに行った。その帰りに必ず寄ったのが清水谷公園だった。その頃は大きな池をめぐって桜が咲き^{おきた}、茶屋が設けられ、夜になれば弦歌さんざめく妖しい場所だったという。ここは今、オフィスビルの間ですっかり近代的な公園となっている。それでも夏には蟬を五十匹もとった子供達^{はさま}が

いると話した時、父は一瞬遠くを見るような眼をした。つわものどもが夢の跡……の感慨だろうか。父の回想によれば、

「着物姿にたすぎがけ、お白粉と紅を濃く塗ったお姐^{ねえ}さんたちが沢山いて、少年の私にとさらな秋波を送り、私がまっ赧^かになって駆け去るとみんなして声をあげて笑った。それがなんともなまめいていて、私の胸をどきどきさせた……ほんの時たまだが、見世物小屋が軒^{つら}を並ねたのもこの池の端である。ろくろ首、侏儒、その他の因果もの、でつちものの、軽業^{かるわざ}から力自慢、それらがアセチレン・ランプの明りの中で異様な魅力を醸し出したものだ。この時も私は胸をわくわくさせながら、大方は一人ぼっちでほつき歩いた。この妖しくグロテスクな魅力は十二分に私の心を捉^{とら}えた……後年の私の妖しきものへの傾斜は、正しくこの池の端で培^{つちか}れたように思う」（『東京人』平成元年六月号）

どうやらここは『吉原御免状』発祥の地でもあったようだ。

そして少年期の後半、小学校六年から中学二年にかけて父はかなりぐれていた。特注の

学ランで肩をいからせ、さらしを巻き、刃物まで持ち歩いた。ぐれた理由を本人はあつさり、ダンディズムではないかという。今風にいえばツツパリをカッコイイと思つて不良になり、「ある日自分の鏡に映る姿が醜みにくいと感じた時」非行が終つたと。そして大人のもつともらしい意見は何の効果もなかった。

この素気そっけなく抽象的な言い回しの裏にどういう状況があつたか推理することは可能だろう。しかし様々な推量の中で一つだけはつきりしていることがある。父が不幸や非行を社会或いは家庭状況のせいにすることを極端に嫌つたこと。善であれ悪であれ自分の行動の根を自分以外の地点に置いて、人はいつたどこに立つとうというのか。自分の足元を見つめずにどこに立てるというのか。そういう問いかけが、ここにはある。確かに人間は社会的動物である。しかし社会状況によつて非行を説明する姿勢は、シベリア流刑によつてドストエフスキーの小説を説明しようとするようなものである。無関係であるとはいわれない。しかしそこには自己の中の悪と、その愚かしさへの悲しみの視点が欠落している。